

練習問題 6 (労働市場)

問 1

古典派またはケインズ雇用理論に関する次の記述のうち、妥当なものはどれか。

【地方上級・平成6年度】

- 1 古典派雇用理論によると、賃金は下方硬直性があるので、労働需要が減少しても労働者は名目賃金を下げるのに同意しない。
- 2 古典派雇用理論によると、労働者がある賃金で働くことに同意しても、労働需要が少ないために失業することを摩擦的失業という。
- 3 ケインズ雇用理論によると、雇用量は労働需要と労働供給の交点で決まり、交点は常に完全雇用の状態を保っている。
- 4 ケインズ雇用理論によると、有効需要の大きさが不十分であると、不完全雇用の状態になる。
- 5 ケインズ雇用理論によると、完全雇用の均衡が自動的であると、摩擦的失業や非自発的失業は存在しない。

問 2

次の中で、自然失業率に含まれない失業はどれか。一つ選べ。【マクロ経済学・入門】

- (1) 非常に高い技能は持っているが、プライドが高いため、企業が支払ってくれる賃金よりも高い賃金でないと働く気のない人
- (2) ほとんど働く気はないが、失業保険がもらえるのでとりあえず職探しをしているふりをしている人。
- (3) 転職の際に、次の仕事が始まるまで一時的に無職でいる人。
- (4) どんな賃金水準でも働く気があるが、いつまでたってもどこの企業にも雇われない人。